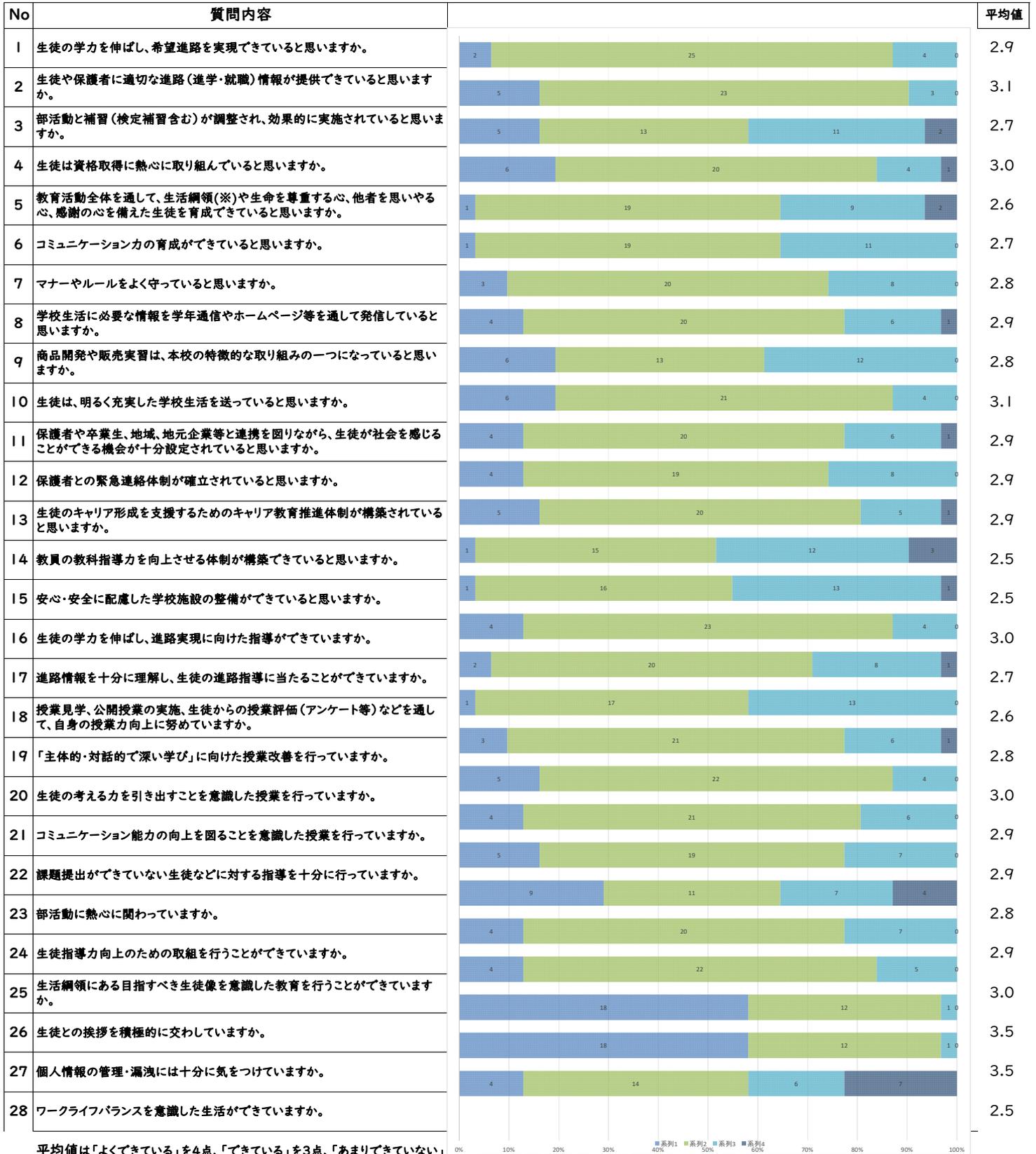


## 令和5年度学校評価 教職員アンケート集計結果

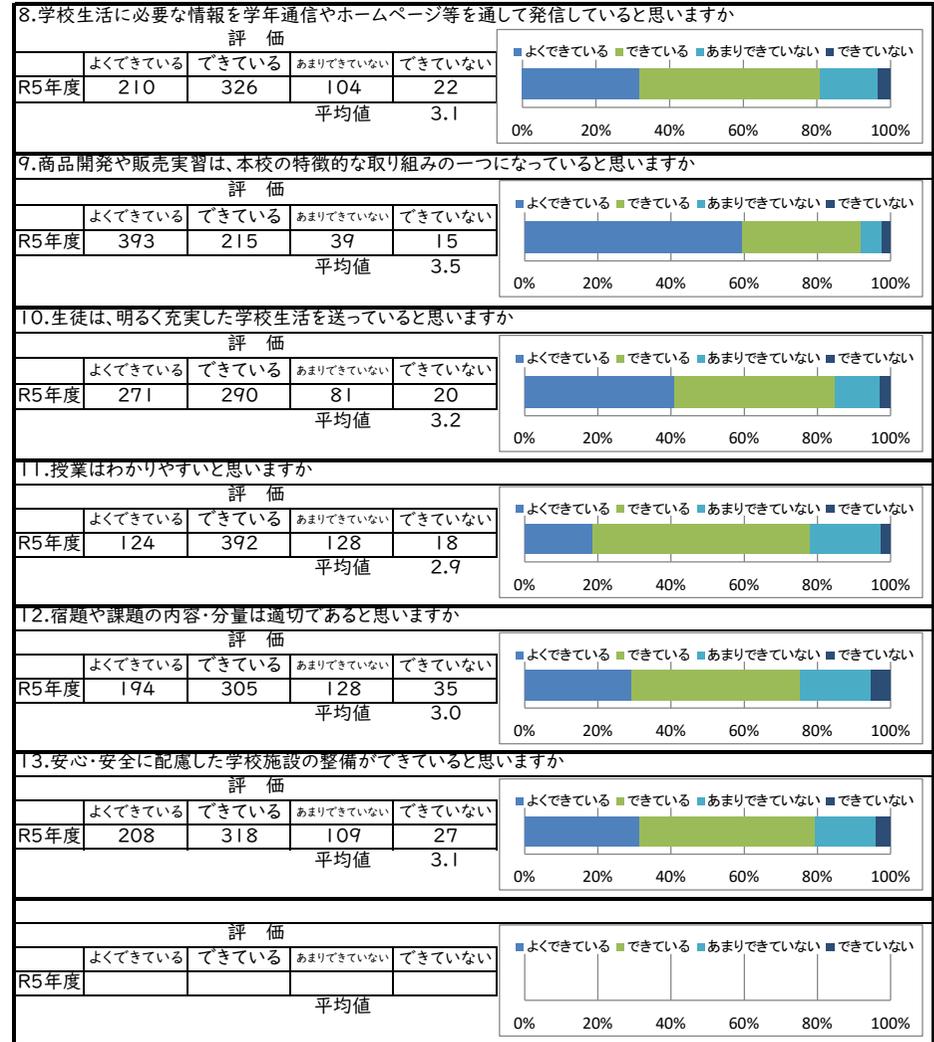
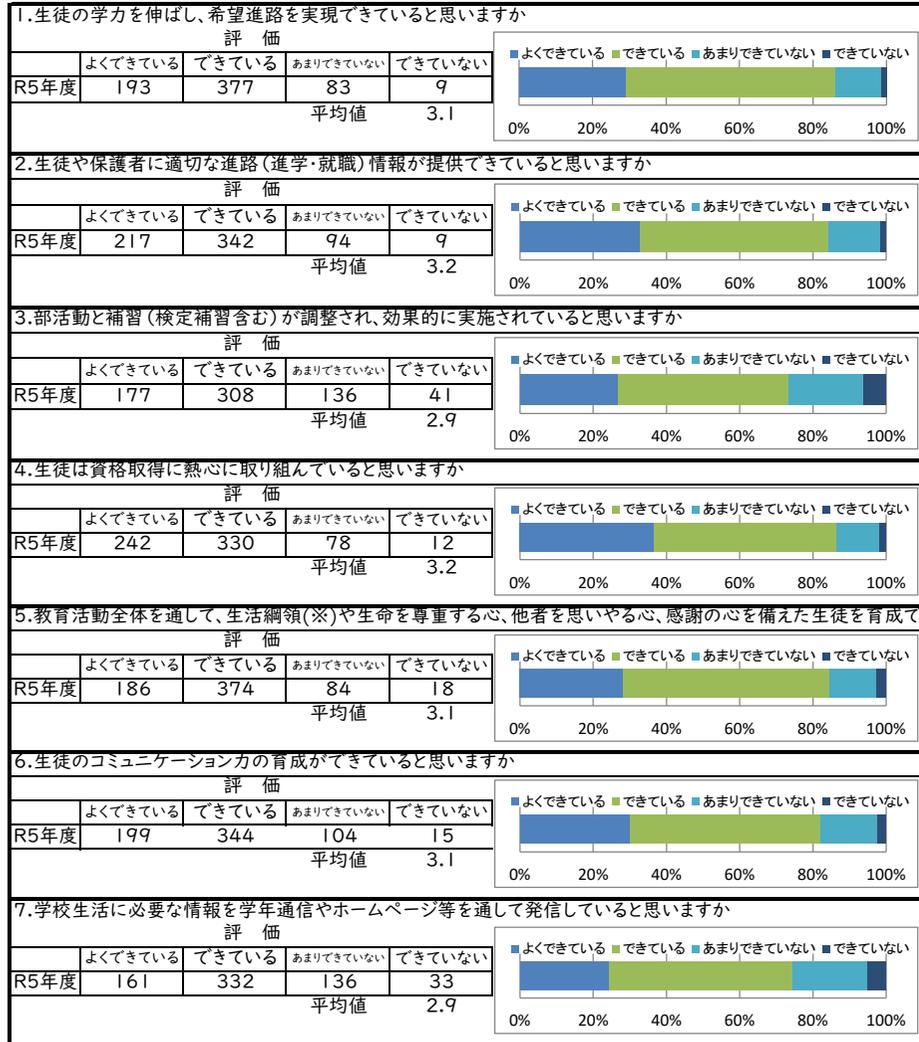
[内部評価 対象:教職員]

[39名]



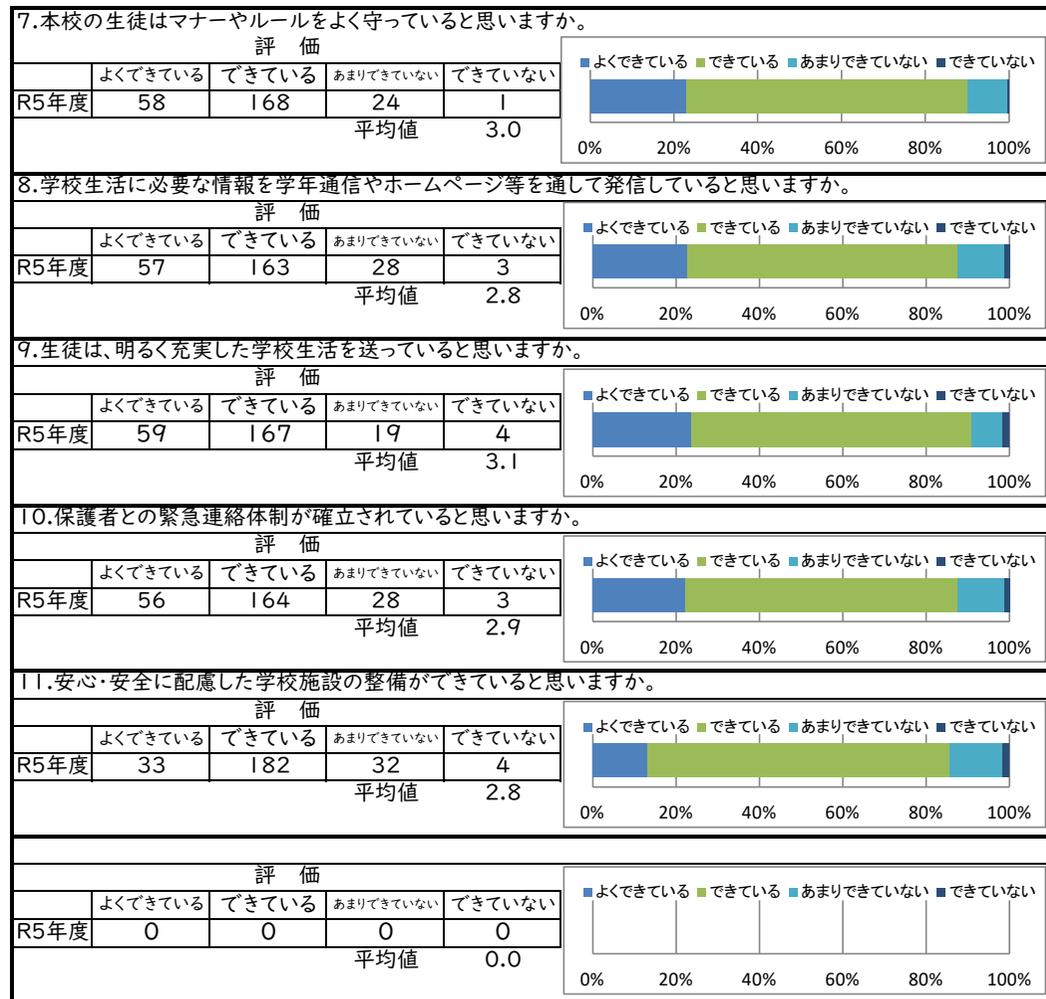
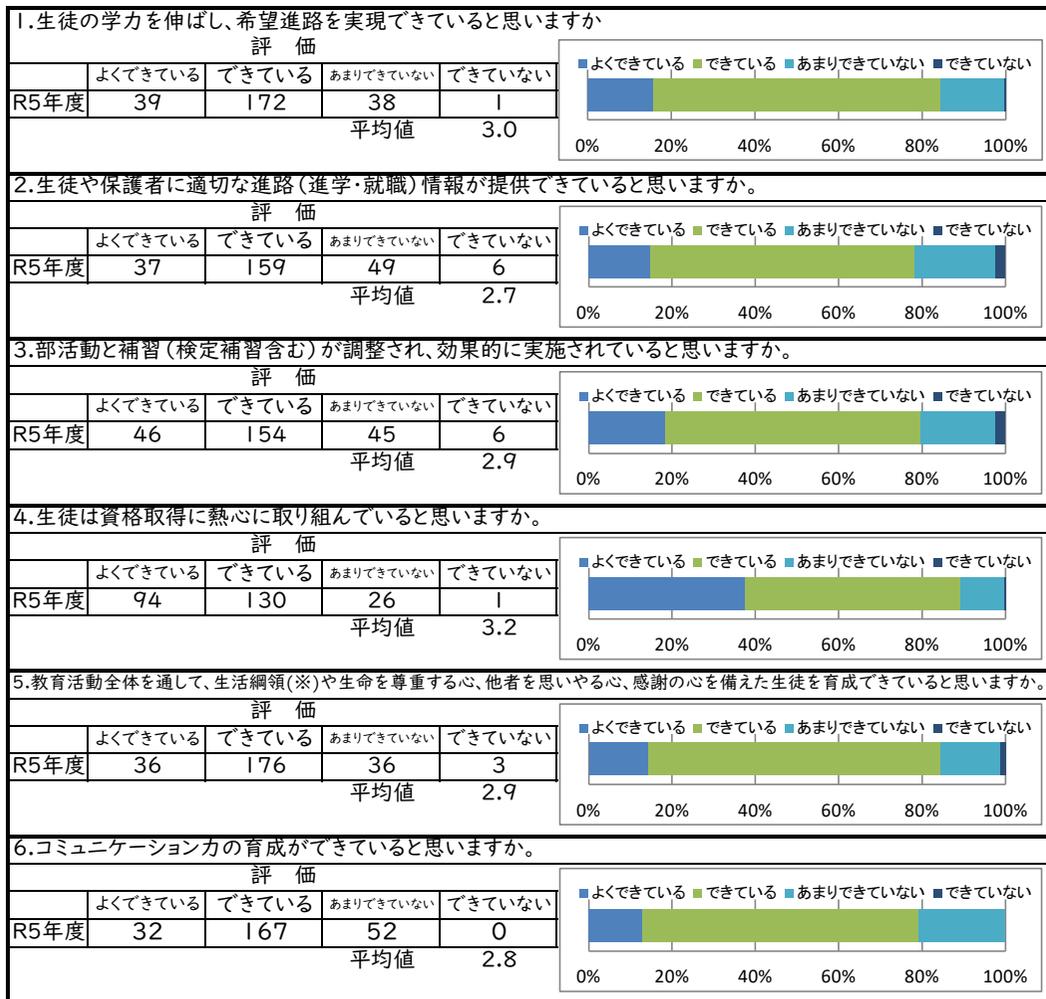
※ 生活綱領 ・「自分で考え自分で行う人となろう」 ・「創意工夫に生きる人となろう」 ・「共に喜び生きる人となろう」

令和5年度 学校評価 生徒アンケート集計結果（生徒624名回答）



平均値は「よくできている」を4点、「できている」を3点、「あまりできていない」を2点、「できていない」を1点とした平均の値となっています。  
 ※生活綱領「自分で考え自分で行う人となろう」「創意工夫に生きる人となろう」「共に喜び生きる人となろう」

令和5年度 学校評価 保護者アンケート集計結果（保護者230名回答）



平均値は「よくできている」を4点、「できている」を3点、「あまりできていない」を2点、「できていない」を1点とした平均の値となっています。  
 ※生活綱領「自分で考え自分で行う人となろう」「創意工夫に生きる人となろう」「共に喜び生きる人となろう」

# 令和5年度 学校評価報告

〔内部評価〕 対象：各専門部・学年

A:よくできた B:できた C:あまりできなかった D:できなかった

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
総務	・各部・各学年・各科・PTA・琴陵会(同窓会)との連携を密にし、学校前提の円滑な運営に努める	・新型コロナウイルス関連で各行事の中止や、規模を縮小しての実施を余儀なくされたが、校務運営委員会などを通じて、スムーズな運営を図った。 ・集会行事などは、感染状況や気温などに応じて動画配信システムを使用し、各HRにおいて一斉配信でも実施することができた。	A	・年間行事予定からの行事変更が見られた。コロナ禍においても実施可能な行事の方法等、実施について見直しを行う必要がある。 ・動画配信システムの有効活用。	・年間行事計画の計画段階で、各種行事について感染症防止策を取りつつ実施できる計画をたてる。また、行事の精選を図る。
	・広報活動の工夫と充実を図り、本校の特色(魅力)や情報を学校内外へ発信する。	・学校紹介や部活動紹介の動画作成や学校ホームページの更新など外部への情報発信回数を増やすことで、本校(商業高校)の特徴や魅力を伝えることができた。 ・各中学校へ学校紹介に行くことで、オープンハイスクールへの参加者が増えた。8月、11月の2回にわたりオープンハイスクールを実施し、中学生600名、保護者430名が参加した。(昨年度より200名増加)	A	・オープンハイスクールの申込時期や、中学3年生の進路選択の情報提供として、学校案内パンフレットなどの広報資料を早い段階で作成・配布する必要がある。 ・ホームページに関しても、姫路商業の授業や部活動、取り組みなど学校の特色を幅広く情報を発信することで学校への理解を深めることにつながる。	・学校ホームページでは、各部署・学年との連携を図り、情報提供や情報発信など学校全体で取り組む必要がある。また、情報発信の頻度についても新しい情報を随時発信していく必要もある。 ・オープンハイについては、参加者多数のため1日2部制や2日間開催など実施形態を工夫し、1回の参加者を少なくしたうえでより姫路商業を理解してもらえようような取り組みが必要である。
	・LHRや講演会などを通じてデートDVやインターネットによる人権侵害等、今日的な人権問題について触れ、その実態を学んで理解を深める。 ・人権にかかわる問題の解決に向けて自主的に行動できるよう人権意識を高める。	・今年度は対面で人権講演会を実施できた。講師を務めた弁護士が、トラブル例や対処法などを具体的に挙げて講演していただき、生徒は自分ごととして考えながら学習を進めることができた。 ・人権LHRを通じて人権の問題について各種教材を用い考える機会を定期的に持つことができた。また、生徒同士が自分の考えを伝えあい聞き合う機会をもうけることができた。 ・定期的に人権推進委員会を開き、各部・学年と連携して人権問題への理解に努めることができた。	B	・人権アンケートについて今日的な課題に向けて一部見直しを図ったが、法務省が掲げる「啓発活動強調事項17項目」全てを十分に反映しきれていない。 ・実施したアンケート結果を全体で共有しきれていない。また教育活動に反映しきれていない。	・人権アンケートについて、全体のバランスを考えつつ、法務省が掲げる「啓発活動強調事項17項目」を反映させた見直しを図る。 ・実施したアンケート結果を全体で共有し、また教育活動に反映できるよう推進委員会を中心に連携を取り工夫する。
・図書委員をはじめとする生徒たちが自発的に図書室の整備や図書管理を行えるよう指導・助言する。 ・「図書だより」を通じて図書室の広報や書籍の紹介を行い、積極的に図書室が活用されるよう取り組む。 ・新聞紙面の掲示等を通じて、現代の課題や身近な話題を提供する。	・定期的に図書委員会を開催し、書籍の選定、「図書だより」の発行、図書室の環境改善などに取り組むよう指導することができた。 ・図書委員会を通じて図書室の整備や書籍管理・帯出業務などに取り組ませることができた。 ・入試準備や授業に新聞・書籍の利用を勧めることができた。 ・調べ学習やプレゼンテーションに図書室の設備を活用することができた。	B	・書籍の環境整備、整理・分類が必要であり、特に除籍作業を要する書籍も散見している。 ・図書委員会では、委員自身に読書活動に関心を持たせるよう指導することが必要である。 ・生徒自身が普段の生活や学習の中で疑問をもち、自ら調べ、考えるよう指導することが必要である。 ・上記の自学活動において、図書室や書籍がどのように活用できるかという指導が求められている。	・図書委員会でのビブリオバトルや読書会など書籍に触れる機会を増やし、読書活動に関心を持たせる指導を行う。 ・「図書だより」の作成においては、書籍の紹介だけではなく生徒自身が紙面構成を考えるなどなど自主的に考える場を増やす ・昼休みや放課後の委員会活動での管理業務を通じて、書籍を大切にすることを育む。	

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
教務	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら学び、自ら考える力を育成するため、教科内研修、公開授業を推進し、授業改善を勧める。研究授業を行い授業改善・自己研鑽に努める。</li> <li>・能力・適性、興味・関心、進路に応じた教育課程の研究に努める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公開・研究授業を行い、教科内研修を推進した。</li> <li>・評価カリキュラム委員会を通して、各教科からの要望を集約したり、新たな学校設定科目を設けることができた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての教科で公開・研究授業を実施できなかった。</li> <li>・すべての教科の要望に応えられる教育課程を提示することができなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度や学期など授業評価の実施時期を示し、学校全体で取り組む状況を作る。</li> <li>・評価カリキュラム委員会の計画的な開催を定着させる。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現行カリキュラムの見直し、改善を行う。</li> <li>・観点別評価の手法について、現状の課題の把握、解消に向けた評価方法の見直しを行う。</li> <li>・姫商生に付けさせたい資質・能力を教科ごとに考え、教科横断的な教育活動ができるようにする。</li> <li>・特別活動における観点別評価方法の定着を図る。</li> <li>・総合的な探究の時間について、現状の課題の把握、解決方法について協議し、効果的な運用を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価カリキュラム委員会を通して、現状の観点別評価の方法での課題を、職員全体で共有することができた。</li> <li>・総合的な探究の時間の実施を取りやめ、教科商業の課題研究の見直しを図る、という生徒の学習効果を損なうことなく、現状を改善する方策を決定することができた。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観点別評価の方針に沿った評価方法で、生徒の実態に即した評価になっているか、全職員で検証、確認を続けていく必要がある。</li> <li>・教科横断的な学習の実現が、教科商業の課題研究においても実現できているか、検証する必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価カリキュラム委員会を連絡、報告の場として、活発的な意見交換を行う。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タブレットPCや単焦点プロジェクタ、BYOD端末を活用した授業展開など、教員の情報活用能力の向上と積極的な活用を推進する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタル教材やアプリの活用が多くの教科で行われた。</li> <li>・アプリの活用方法に関する研修や意見交換を行い、より有用な運用について議論することができた。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報モラルや知的財産権に対する意識を育成する必要性を全職員が認識して指導に当たる必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導部などの情報モラル教育も情報教育の一環として位置づけ今後の対応を学校全体の課題として考えていく。</li> <li>・アプリの活用事例の共有など、研修の機会を定期的に設ける。</li> </ul>
システム管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインネットワークサービスである、google Classroomやoffice365のアカウントの管理やサービス内容の研修を行う。</li> <li>・BYOD端末を用いた授業展開の技術的なサポート、事例提示などを積極的に行う。</li> <li>・情報セキュリティ実施手順に沿った運用を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの教科で、タブレットや単焦点プロジェクタを活用した授業展開を行い、昨年以上に積極的に取り組むことができた。</li> <li>・BYOD端末の変更を、職員全体の上承を得て、決定した。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・BYOD端末の変更により、管理方法や活用について新たな問題が生じる可能性がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他校での導入事例など、幅広く情報を収集する。</li> <li>・部署内での役割分担の見直しなど、組織的に対応する。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タブレットPCや単焦点プロジェクタ、BYOD端末の管理、活用のためのサポートを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・BYOD端末や単焦点プロジェクタの修理対応を迅速に行った。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室に配備済みの、単焦点プロジェクタなどの機器が経年劣化によると思われる故障が4台で発生し、授業に支障が出た。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケーブルなど付属品の点検や整備と故障時の教室変更などの対応策を検討、周知しながら対応する。</li> </ul>
生徒指導部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通マナーの向上と交通安全の高揚を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年間3回の交通安全運動（下校時）を実施。</li> <li>・自転車交通安全指導。</li> <li>・交通安全講習会（1学年）。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・並列走行、接触事故が多い傾向。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常から呼びかけを継続するとともに正しい交通マナーを理解させるとともに、家庭との連携を図る。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制服変更にとまなう校則の見直し。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新制服に見合った内容に変更。</li> <li>・社会通念上を鑑みた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒と教員との共通理解を得るのが難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校の伝統を継承しつつ、積極的改善を継続検討していく。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ事案の把握と撲滅。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめアンケートの実施及び、聞き取り。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートに記入されていないトラブル事案が数件あった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめアンケートの実施回数とアンケート内容の見直しを検討。</li> </ul>

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
生徒支援部	・教育活動全体を通して心身の健康の保持・増進に必要な自律的能力を培い、生涯にわたって主体的に健康な生活を保持するための基礎を培う。	・健康診断の事前・事後措置の機会を活用し集団 ・個別に自らの健康に関心を持つ指導を行った。 ・感染症対策のため検診実施方法を見直し三密を回避する方法で実施した。 ・保健室の機能を十分にいかしながら、保護者や学校医と連携を密にし、心身の健康問題の早期発見や早期治療、疾病の予防に努めた。	A	・健康診断結果を受けて、生徒自らが健康意識を持ち、健康の保持増進につながる行動がとれない生徒がある。 ・集団での健康診断時のプライバシー保護の徹底が困難。可能な範囲で最大限配慮し実施している。 ・生徒が病院受診する時間の確保が難しい。 ・がん教育の準備が遅れている。	・健康診断後の事後指導を個別に丁寧に進める。 ・健康教室を増やし、生徒が健康に関心を持つ機会を増やす。 ・学校として生徒の日常生活の中に病院を受診し定期健診や検査、治療を受けるための日を確保する。 ・がん教育研修会等に参加し実施できるよう準備する。 役割分担見直しと職員の負担軽減を考えていく。タイムリーな情報発信と対策の重要性を継続して伝えていく。
	・保護者や地域社会との連携を図りながら多様性の社会の中で、生徒にその一員としての共生の心を育成し、生命の大切さを体得する。	・保護者・専門機関と連携し個別に支援を必要とする生徒への支援を組織的に行った。 ・特別支援校内委員会を実施し支援の必要な生徒の状況を共有できた。	A	・支援が必要な生徒の把握と情報共有を円滑に実施する必要がある。 ・支援が必要な生徒の中学校からの情報提供がない場合があり、対応が遅れが出る場合がある。 ・支援ファイルの定期的な更新ができていない場合がある。	・年度初めに支援が必要な生徒の把握、ファイルの作成更新、情報の共有までのスケジュールを作成し確認する。情報が更新されるごとに共有を行えるよう体制を整える。 ・可能な限り入学時に把握する。入学後把握した場合は必要に応じ保護者・中学校・関係機関と連携し生徒が学校生活で困難な状況にならないよう努める。 ・キャンパスカウンセリングをさらに生徒に開かれた機会にする。 ・特別支援校内委員会を時間割に組み込みメンバーが全員出席できるようにする。
キャリアセンター	各学年一貫した進路指導目標を定め、自己実現を達成するために必要な勤労観・職業観を育成し、進路意識を高める指導体制の充実を図る。	3学年との朝の打合せ等で連携を図った。また、各学年実施の進路行事では学年進路担当者で連携を図った。	B	多様な進路支援が必要となるため、3年生への支援が業務の中心となり、他学年との連携が手薄になった。	入学時から三年間を見据えた計画を立て、学年の動き、情報をより把握するためには、放課後等の時間を利用しての連絡会の時間を持つことが望ましい。
	進路選択の支援・援助を図るために、進路相談を計画的に行い、自己の可能性や適性を理解させるとともに、主体的な進路選択能力を育成する。	年度当初に3年生進路希望別に分かれてキャリアセンターとの面談を実施し意識の向上を図った。就職面では、卒業生を囲む会・応募前職場見学・インターンシップ・公務員学習会を実施した。また、生徒・保護者向けの説明会も実施した。進学面では、卒業生を囲む会、志望理由書講座を実施した。模試に関しては実力診断テストを取り入れ、具体的な学校名や職種に対する適性を生徒・教師ともに共有できるようにした。	B	3年生の進路決定時に、社会が抱える課題に対して、これまでの学びを通して、自分自身がどういった立場から貢献できるかを見通せない生徒が多数いる。	卒業後を見据えた3年間のキャリア活動における、ねらいや目標を明確にし、周知していく。
	進路指導上の重要な指導事項に係る情報管理を徹底するとともに、学校の進路指導方針の教職員間での共有を図り、生徒・保護者に対する説明責任を果たす。	職員研修を実施し教職員間での共有を図った。また、キャリアセンターだよりを発行しホームページに掲載し進路に関する現状報告を実施した。	B	学期ごとに振り返りを行い教員間で情報共有しより充実した指導に繋げていく。	生徒のキャリア活動の根幹をにない、各部・学年、各教科に広げていくようにする。 ・キャリアについて考える学年行事を設け、活動や検定の振り返り、進路について考える機会を設ける。

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
商業科	・専門教育の深化を図るとともにスペシャリストを育成するために、個々のニーズや時代の流れに合った商業の教育課程や指導方法を確立する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題研究の実施内容・方法の変更</li> <li>・課題研究発表会を体育館実施に戻し、大学教員を招いて講評およびアドバイスをいただいた</li> <li>・特別非常勤講師等の活用</li> <li>・受験検定の精選</li> <li>・高崎商科大学との連携により、日商簿記1級に挑戦する土台の構築</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・商業科目内で課題研究につながる取り組み（生徒に考えさせ、提案、発表、コンテストへの応募への推奨）</li> <li>・講師による講演会の機会の確保</li> <li>・日商簿記3・2級の合格者および情報処理国家資格合格者の増加（日商簿記検定受験料の値上げにより、受験しにくい環境になる。全商検定も将来的に値上げされる。）</li> <li>・連携授業が土曜日にあるため、教員の勤務の取り扱いの問題が生じる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年次より課題研究に向けた体系的な授業展開の実施。</li> <li>・課題研究の運営法を、各教員1講座持つことにより、さらに深化した研究活動ができるようにする。</li> <li>・資格取得だけではなく、ビジネス事例を用いたグループ学習や発表の機会を増やす。また、ビジネスゲームや各種コンテストへの応募を通じ、知識を活用しアイデアを生み出すことで課題研究につなげる授業展開を行う。</li> <li>・市役所や姫路商工会議所・青年会議所等の連携機関と密に連携を取り、講師確保に務める。</li> <li>・高崎商科大学との連携により日商簿記講座の動画視聴による学びが可能となったため、反転学習や復習学習に活用することで、自宅学習の習慣を付ける。また、教員の指導力向上にもつなげる必要がある。</li> <li>・プログラミングにおいて、アルゴリズムの考え方や仕組み理解を中心とした授業展開を実施し考え抜く力を身に付けることにより、合格率上昇につなげる指導を展開する。</li> </ul>
	・デジタル社会に対応したスマートスクール構想の実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な場面での活用が広がっている。</li> <li>・動画配信システムにより様々な行事や講演会を体育館に集めることなく実施が可能となった。また、課題研究の講座単位で活用するなど、活用法が広がっている。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室のプロジェクターでは光の具合や見る方向により、見えにくい生徒もいる。</li> <li>・単方向のため、教室の雰囲気が発信側に分かりにくい点がある。</li> <li>・次年度以降の活用方法の模索。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教室で担当する先生方に配信内容を事前に十分把握してもらうことが必要。</li> <li>・機材の操作方法を一部の教員しか知らず、今後のために引き継ぎ等が必要。</li> </ul>
情報科学科	・コンピュータの活用技術の向上と社会に触れる機会の充実	・専門学校や社会人デザイナーに特別非常勤講師として授業をしていただき、現代の技術や今後の動向などを理解させることができた。	A	・3学年全体での活動を考え、情報科学科としての設立当初のスピリッツを生徒に植え付け、発信力と行動力を持ち合わせた人材を育成するために継続できるかが今後の問題点である。	・近隣の企業や研究機関との連携について考える。
	・工業科目（情報技術）のブラッシュアップと国家資格取得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報技術の基礎から応用技術まで、工業科目の中で段階的に展開して実施した。</li> <li>・5年に一度の特色学科教育用実習システムの更新にあたり、すべての実習機器が更新された。社会状況を考え、すべてのモノが繋がるIoTシステムを導入、ノーコードでシステムを構築できるようにした。また、サーバーを操作する機会がなかったため、小規模なクライアントサーバシステムを設置、構築実習を模索した。</li> <li>・プログラミング学習でPythonを学んでいるので、制御対象としてドローンを導入した。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特色学科教育コンピュータ更新に際し、どのような生徒を育成するかを、原点に振り返って教育内容を考えていく必要性を感じた。</li> <li>・新しい機器の実習での利用や教材研究にどのように役立てたか検証したい。</li> </ul>	・生徒が自分で目標達成できたと感じる実習教材など考える。

	重点目標	成果	評価	課題	改善策等
1 学 年	・「安心」・「安全」な環境の中で、「充実感」・「達成感」を味わえる集団づくり	・お互いの個性を認め合う生徒が増え、生活面はもとより学習面でも切磋琢磨する様子がうかがえた。	B	・様々な環境や集団を通じて、他者に働きかける力やコミュニケーションスキルを向上させる。	・総合的な探究の時間の中で外部講師による講演会などで自身の興味関心を広げ、幅広い年齢の人と触れ合うことで社会性を育み、自分の言葉で語れる体験を増やしていきたい。
	・「素直な力」の育成と「社会で通用する」生徒の育成	・挨拶をはじめとする基本的生活習慣が確立し、集団生活を通して自分の役割を果たす様子がうかがえた。	B	・何事にも見通しをもって計画を立て、評価・改善を加える課題対応能力を向上させる。	・体験活動を通じて、自分の長所や短所に気づかせ、自ら改善しようとする態度を育成する。 ・学ぶ・働くことへの意義や役割を理解させ、将来を設計する力を育成する。
2 学 年	・生活習慣・学習習慣の確立と主体的な進路選択に向けての取り組み	・自らの目標を持ち、計画的に資格取得を目指すなど、主体的に取り組む姿が見られた。 ・総合的な探究の時間では、「販売実習」を実施。文化祭や大手前公園での販売実習ができた。 ・SDGsをテーマにした企業の社長による講演会を聞き、将来の職業に対し、イメージさせることができた。	B	・目標設定が定まっていない生徒は学習意欲の向上が見られず、検定資格取得に対する意欲の低下も見られた。 ・販売実習では、積極的に取り組むことができたが、企業とのやり取りがスムーズに出来なかったことや接客や販売するにあたって、ビジネス活動の難しさを感じさせられた。	・進路実現を見据えた学習活動を確立するとともに、個に応じた指導の実施と目標の再確認を行う必要性があり、丁寧に対応していきたい。 ・販売実習を実践できる場を増やして、ビジネス活動の経験をさせていきたい。
	・自己理解とコミュニケーションを深めるための取り組み	・SDGsをテーマにした修学旅行を通して、自然を体験をするとともに、集団としての規律を意識した行動をとることができた。また、クラス間を越えて信頼関係を構築することができた。	B	・SDGsをテーマにし修学旅行で自然など普段出来ないことを体験できたが、一部の生徒は、風紀を乱すような行動もあった。	・普段出来ない体験を通して、新たな発見や集団行動のなかで自分の長所や短所に気づかせ、自ら改善できる態度を育成し、今後の進路等に活かせるように結び付ける。
3 学 年	・自ら学び、自ら考える力を育成すると共に、基礎・基本の定着と実践力を身につけ、個を生かす学習指導の充実に努める。	・自らの進路に即した目標を持ち、計画的に資格取得や受験手続を進めるなど、主体的に取り組む姿が見られた。	B	・先を見据えた準備に気持ちの迷いが生じ、提出等がギリギリになってしまう生徒が数名おり、決裁が回るまでに焦ってしまうことがあった。	・進路の準備に余裕が持てるよう、生徒や保護者に向けたガイダンスを綿密に計画する必要がある。
	・規律を重視する姿勢を身につけさせるため、信頼関係を基本とした指導を目指す。	・学年行事を通して集団としての規律を意識した行動をとることができた。また、テーブルマナー講座においてTPOを意識した行動を心掛けることができた。	A	・行事において、出席率に差がある。発熱や出席停止など仕方ないものもあるが、それ以外のもので所属の一体感が減少しているように感じられる。	・進級や卒業に必要な授業のみではなく、学校の生徒という組織の一員である価値観が高まるよう指導していきたい。
	・公平性を守り、主体的な進路選択が出来るよう指導・助言すると共に、家庭との連携を密にする。	・キャリアセンターの指導をもとに、小論文対策や面接練習等を実施し生徒の進路意識を高めた。また、適切な時期に進路ガイダンスを実施し、保護者等にも進路の知識を共有することができた。	B	・ガイダンス等で指導しているが、面接練習等あまり実施していない生徒も見受けられた。また、調査書発行等必要書類において目を通す箇所が多く、生徒に対して行う指導時間にも追われる感覚であった。	・必要書類の簡略化やデータベースの一本化をはかり、業務を減らしながらも、生徒に対面できる時間を確保できるようにしていきたい。混雑する期間は学年の先生方も多くの時間を残業にあてなければならなくなっている。